古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 246 号（2023 年 5 月）

満洲文字の文字表をめぐって(10)
―外国借音用の文字 ts' dz 、ž、c'y jy、母音 y―

吉池孝一　中村雅之

はじめに

中村：前回は外国借音用の文字 k' 、g' 、h' の字形について検討しました。

吉池：基本字形 に二種類あることを確認しましたね。一つは女性子音字 を書く要領で最初の部分を「×」を描くように交差させたもの（①）、もう一つは女性子音字 の上に二本の髭を付けたようなもの（②）でした。

①×様の字形（清・舞格著『滿漢字清文啓蒙』[1]（雍正庚戌(1730)程明遠題）第一巻の「清書運筆先後」による）

②鬚様の字形（『清漢對音字式』（1772 年上喩、1909 年新鐫）による）

中村：上に挙げる二種の字形と、下に挙げる Windows フォントの基本字形 とはだいぶ異なるものでした。Windows の満洲文字フォントは、「満洲文字-Wikipedia」に掲示されているわけですが、unicode の 183A（k'）, 186C（g'）, 186D（h'）です。これらは、モンゴル文字の外国借音を表記するガリック文字のフォントをそのまま流用したものであろうということでした。

・ガリック文字を流用した字形（Windows フォント）

吉池：満洲文字フォント k', g', h' は明らかに実際の字形①②とは異なりますが、議論をする上での便宜のため、これらのフォントの出だしは「×」様であると“見なして”利用しましょうということでした。

中村：実際の字形、有圏点新満文の新たに作られた①×様の字形と②鬚様の字形ですが何を

[1] 拓殖大学図書館蔵本の複写を利用。

参照したかということが議論にのぼりました。具体的にはチベット（西蔵）語音と梵語音の ga を表記するガリック文字を参照した見ることがでるということでしたね。

吉池：なお、前回 ᡴᡳ について頭位形のみを出して、中位形については確認できていないとしましたが、訂正します。『滿漢字清文啓蒙』の第一字頭に kuk'an 炕沿子、šag'o 沙菓子の二例がありました。迂闊でした。

中村：以上は字形の話ですが、興味深いことに、“用法”そのものが異なる資料がありました。満漢「千字文」は、外国借音（主に漢語音）表記用の ᡥᡳ を使用すべきところ、そのかわりに男性子音字 ᡨᡳ h（母音 a, o, ū の上）を使用しています。

・“規範的”な表記（ᡴᡳ、ᡤᡳ、ᡥᡳ を使用）
　破裂音声母の漢字音：可 k'o、抗 k'ang、高 g'ao、羔 g'ao、過 g'o、果 g'o、岡 g'ang
　摩擦音声母の漢字音：海 h'ai、火 h'o

・“規範的”でない表記（ᡨᡳ h を使用）
　摩擦音声母の漢字音：号 hao、韓 han、寒 han、皇 howang、禍 ho、何 ho、毀 hūi、

なお、前回は「稾 h'ao」も挙げましたが、もう一度確かめたところ、正しくは「g'ao」と綴られていましたので、この場を借りて訂正し、削除します。

吉池：おそらく、満漢「千字文」の作成に関わった満洲人は、男性母音 a, o が後続する「摩擦音声母の漢字音」を、軟口蓋音よりも口蓋垂音に近いと判断し、このような表記としたのでしょう。

中村：同様の用法を示す資料が複数あるので、場合によっては、有圏点新満文の文字表を書き変えなければならない、ということでした。

吉池：この特殊な用法の調査と報告は中村さんにお願いすることとして、次の外国借音用の文字を検討しようということでした。今回は ts' dz 、ž、c'y jy、母音 y について議論をしましょう。

文字 ts' と dz について

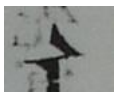
吉池：文字 ts' と dz を含む文字表は前回出しましたが、重複を恐れず ts' と dz の部分を再度提示すると次のようになります。文字表の音価［　］は、池上二郎(1955)[2]をそのまま採用したものです。[ts'] のように有気音を [ʰ] で示してありますが、私たちの議論の中では、

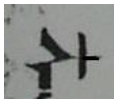
[2] 池上二郎(1955)「トゥングース語」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』下巻、東京：研究社 462 頁-464 頁に掲載された文字表の音価。

有気音を音声記号［ʰ］で示し［tsʰ］とします。

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形	単独の字形
tsʹ[tsʹ]				
dz[d̥z]			*	*

文字 s、文字 tsʹ、文字 dz の実際の字形を『満漢字清文啓蒙』（1730 年題）で確認すると次のとおりです。


文字 s

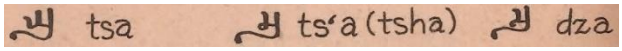

文字 tsʹ

文字 dz

中村：文字 tsʹと文字 dz は、モンゴル文字の s、すなわち無圏点満文の s の、右に筆画を加えた文字のように見えますが、ガリック文字はどのようでしょう。

吉池：チベット（西蔵）語音の破擦音を表記するガリック文字をみると次のとおりです。

チベット（西蔵）語音用



中村：tsʹ[tsʹ]（[tsʰ]）、dz[d̥z]は、上に挙げたガリック文字を参照したとは思えません。やはり、無圏点満文の s［s］に対応した文字の右に、筆画を加えた、ということでしょう。ところで以前、吉池孝一(2022)[3]で、と がどのようにできたか言及していましたね。

文字 tsʹ と dz を作成した手順

吉池：文字自体が何を参考にして作られたのか、もしくは独自に作られたのか、ということを論点としたものではありません。有圏点新満文の文字の作成者たちが、独自に文字 tsʹ と文字 dz を作ったことを前提として、作成の手順を述べたものです。

---

[3] 吉池孝一(2020)「女真文字談義（8）―満洲語文語、文字作製順序、軽声と新文字、借用語の表記―」，吉池孝一・中村雅之・長田礼子編著『女真語と女真文字』愛知：古代文字資料館、2020 年 1 月発行、65-74 頁所収。吉池孝一(2020)の一部を改訂したものが吉池孝一(2022)である。吉池孝一(2022)「漢語音 ts-, tsh-を表記する満洲文字―文字作成手順に反映した満語音韻―」『KOTONOHA』第 233 号（2022 年 4 月）、45-51 頁。

有圏点新満文の文字は、ほぼ同時期に作られたとみてよいので、文字dzと文字tṡの作成において、時間的なずれはそれほど無いのでしょう。しかし、どのような「手順」で新たな文字が作られたかということについては問題にしてよく、下記二つの可能性があると考えました。

①文字s →文字dz →文字tṡ

②文字s →文字tṡ→文字dz

中村：吉池孝一(2022)は①としたのですね。たしか、その論拠の一つは文字の書き順でした。

吉池：その時に論拠は二つ挙げました。一つは、①文字tṡ の書き順です。もう一つは②満洲語破擦音における二項の音の対立の仕方、例えばtṡ［ts^h］）と dz[ḑz]の対立の仕方との関係です[4]。②については、次回以降の対談で議論する機会があると思うので、今回は①の書き順のみを確認します。下記のとおりです。

①文字s → 文字dz → 文字tṡ の手順で作られたと想定することができるわずかな根拠を、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）という満洲語の学習書にみることができます。それは当該書の巻一にある文字tṡ の書き順です。

1　2　3　4　5

中村：2のsに、先ず縦線「｜」を加え3のdzにし、次いで横線「―」（やや不鮮明）を加えて「┼」として4のtṡを作る、という書き順を見て取ることができます。5は最後に母音を加えたものですね。

吉池：　→　→　の順に筆画が加えられているわけですが、筆順の可能性としては、sに先ず「―」を加え、次いで「｜」を加えて「┼」としてtṡ を作っても、よかったはずです。ところが実際は「｜」＋「―」→「┼」とした。それは、文字dzが

[4] 外国借音用の文字作成の順番をみると次のとおり。漢語音のs［s］、tṡ［ts^h］、dz［ts］を区別せずに一つで表記する無圏点満文の段階から、有圏点新満文において、先ず有気音のs［s］・tṡ［ts^h］と、無気音のdz［ts］を区別し、dzを作った。次いでs［s］とtṡ［ts^h］を区別しtṡを作った。有気音のs［s］・tṡ［ts^h］と、無気音のdz［ts］を区別して文字を作るところに、文字作成者達の満洲語音を区別する音の習慣が反映しているとみる。すなわち、満洲語にあっては、有気と無気の別に依って、満洲語の破擦音c, jや、破裂音t, d・k, gなどは区別されており、そのことが、漢語音の文字作成の順番に現れているとみる。すなわち、①（s［s］・tṡ［ts^h］・dz［ts］）→②（s［s］・tṡ［ts^h］）と（dz［ts］）→③（s［s］）と（tṡ［ts^h］）と（dz［ts］）である。

先にできていたという事実の反映とみたいのです。すなわち、① s → dz → ts' の順に文字が作られたという作成の順番が、文字 ts' の書き順に反映したとみるわけです。

中村：調音位置が歯茎である s［s］、ts'［tsʰ］、dz［ts］の基本字形は である。それに調音様式を示す記号を付加して新たな字を作った。一画の縦線「｜」を付して無気音（声の有無という音質については次回議論する）相当の音であることを示し dz を作った。次いで、その dz に対して横線「―」を付して「⊢」とし有気音であることを示し を作った。 は、一見すると、 に「⊢」の二画を付したようにみえます。しかし、文字 dz が先に作られており、それに一画を付したとすると、有圏点新満文の新文字の作成にみられる「一画を付して文字を作る」という方針にそったものとなります。

吉池：他に良い案がでるまでは、 に一画を付して先ず を作り、さらに一画を付して を作ったと想定しておいて、いいのではないでしょうか。

中村：次は漢語の「そり舌音」r-に相当する ž ですね。厳密には、現代北京語の「そり舌音」r-に相当する当時の漢語声母ということです。

文字 ž について

吉池：文字 ž を文字表より抜き出すと次のとおりです。『滿漢字清文啓蒙』（1730 年題）によると漢字の「饒」「熱」「日」「弱」「如」などの声母の表記に使用されます。現代北京語のローマ字表記では「饒」rao、「熱」re、「日」ri、「弱」ruo、「如」ru となります。現代北京語の r には［ɽ］［ɹ］［ʐ］など幾つかの音声記号が当てられますが、［ʐ］を採用しておきます[5]。

---

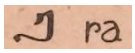
[5] 羅常培・王均(1981)『普通語音学綱要』北京：商務印書館には「濁擦音［ʐ］：如北京“讓”、“人”、“入”的声母ㄖ。」(94 頁）とあり、［ʐ］とする。林燾・王理喜(1992)『語音学教程』北京：北京大学出版社には「美国英語一般讀成卷舌通音［ɽ］。北京話的 r-（如“熱”rè，“然”rán）除特別着重讀以外，一般也只産生軽微的摩擦，也應該属于卷舌通音，但不像美国英語那樣同時需要圓唇。」（68 頁）とあり、［ɽ］とする。なお、国際音声記号（1993 年改訂，1996 年更新。『国際音声記号ガイドブック』東京：大修館書店、国際音声学会編、竹林滋・神山孝夫訳、2003 年）の表によると、［ɽ］は「そり舌音」の「たたき音あるいははじき音」である。接近音ではない。この表によると「接近音」は［ɽ］ではなく［ɻ］である。“讓”、“人”、“入”、“熱”、“然”などいわゆる日母字の北京人の発音の摩擦性は、私の耳にも微弱なものとして聞こえ、ときには摩擦は聞こえないこともある。それによるならば、羅常培・王均(1981)のように［ʐ］とするのは問題があるように思うが、外国人として学習して習慣として身につけた私の r-声母の発音は、摩擦が強く、そり舌化した有声摩擦音［z］のようである。私の外国人としての発音については［ʐ］と表記して良いのであろう。北京語の r-の習得の努力をとおして判断する限りにおいては、接近音［ɻ］と摩擦音［ʐ］の中

翻字と発音　初頭の字形

ž[ʐ]　　

中村：現代北京語のローマ字表記 r-に相当する音を[ʐ]と表記してよいとして、有圏点新満文の文字を作った当時の音がどのようなものであったか難しい問題です。その問題はひとまず措いて、ガリック文字に、参考になりそうなものはありますか。

吉池：梵語音用に次があります。



中村：当時の梵語の r がどのよう音であったか、これも難しいところです。字形について言えば、上に挙げたガリック文字は有圏点新満文の ᠷ 字からは遠いような印象を受けます。むしろ、サンスクリット語の ra を表記するデーバナーガリー文字 र に近い[6]。

これ以上の情報はないので、ガリック文字やデーバナーガリー文字を参照したかもしれない、という程度に止めておきましょう。

次は漢語の「そり舌音」の破擦音に相当する ć, j ですね。厳密には、現代北京語の「そり舌音」ch［tʂʰ］, zh［tʂ］に“相当する”当時の漢語声母ということです。

文字 ć, j について

吉池：ć, j は次のとおりです。

ć[tʂ]　　 i の上　　 i の上

j[d̥ʐ]　　 i の上　　 i の上

※ć と j は i の上。この場合 i は y と翻字する。したがって「勅」 （ći）は ćy と翻字し、「智」 （ji）は jy と翻字する。

中村：この文字表は、メレンドルフのローマ字表記に依った池上二郎(1955)を基にして作成したものとのことですが、第一回目の議論[7]においてメレンドルフのローマ字表記を訂正し

間のような印象をもっている。ここでは[ʐ]としておく。

[6] J. ゴンダ著、辻直四郎校閲、鎧淳訳(1974)『サンスクリット語初等文法』東京：春秋社参照。1984 年補訂第２刷による。

[7] 吉池孝一・中村雅之(2022)「満洲文字の文字表をめぐって(1) ―メレンドルフの文字表、翻字と転写―」『KOTONOHA』第 236 号（2022 年 7 月）、1-11 頁。

ました。メレンドルフは ci [ᡤᡳ] の右に圏（◦）を付した [ᡤᡳ̊] で「勅」を表記し、そのローマ字表記は「̊」を付して c̊y とするわけですが，ji [ᡨᡳ] の右に圏（◦）を付した [ᡨᡳ̊] で「智」を表記する場合のローマ字表記は「̊」を付さない jy とします。この点については、メレンドルフのローマ字表記に整合性がないことは明らかです。そこで c̊y の方の「̊」を削除し cy としました。圏（◦）は子音に付されたものではなく、そり舌声母に後続する特殊な聴覚印象を持つ母音（現代北京語では［ɿ］）、もしくは「音節全体」に付されたものと理解して修正した次第です。

吉池：この修正については、いま一度議論しておきたいと思います。それというのも、c̊, j̊ から「̊」を削除して「c, j」と修正するのではなく、両方に「̊」を付して「c̊, j̊」と修正しても良いのではないか、との異論が出でるかもしれないと考えるからです。

これは、ᡤᡳ ᡨᡳ の圏（◦）を、母音もしくは音節全体に付したものではなく、子音に付したものと理解して、この圏（◦）を、「̊」で翻字し、「c̊, j̊」とするというものです。

中村：それについて考える前に、そり舌音の表記法について見ておきたいのですが。

そり舌音と舌面音の表記

吉池：『滿漢字清文啓蒙』(1730 年題）の第一字頭（子音＋母音)、第四字頭（子音＋母音＋n）、第五字頭（子音＋母音＋ng）をみると下記のとおりです。なお『滿漢字清文啓蒙』の満文に付した漢字は満文の音に対する注記です。当時の漢字音の詳細については、いろいろ議論があるでしょうが、とりあえず、『漢語方音字彙』[8]の現代北京語音を当ててみます。なお、有気音は［ʻ］ではなく［ʰ］で表記します。『字彙』に当該の漢字が無いばあい、他の漢字音から類推して音価を付します。そのばあい、漢字の右肩に＊を付します。

表１．ᡤ c-, ᡨ j-に対する漢字の注記

第一字頭（子音＋母音）

ca 差［tʂʰa］、ce 車［tʂʰɤ］、ci 七［tɕʰi］、co, cū 綽［tʂʰuo］、cu 出［tʂʰu］

ja 渣［tʂa］、je 遮［tʂɤ］、ji 飢［tɕi］、jo, jū 拙［tʂuo］、ju 朱［tʂu］

第四字頭（子音＋母音＋n）

can 攙［tʂʰan］、cen 嗔*［tʂʰən］、cin 親［tɕʰin］、con, cun, cūn 春［tʂʰuən］

jan 占［tʂan］、jen 珍［tʂən］、jin 襟［tɕin］、jon, jun, jūn 諄［tʂuən］

---

[8] 北京大学中国語言文学系語言学教研室編(1989)『漢語方音字彙（第二版）』北京：文字改革出版社。

第五字頭（子音＋母音＋ng）
cang 昌［tʂ^{h}aŋ］、ceng 稱［tʂ^{h}əŋ］、cing 清［tɕ^{h}iŋ］、cong,cung,cūng 冲［tʂ^{h}uŋ］
jang 章［tʂaŋ］、jeng 征［tʂəŋ］、jing 精［tɕiŋ］、jong,jung,jūng 中［tʂuŋ］

ᠴ c に現代北京語のそり舌音［tʂ^h］と舌面音［tɕ^h］が対応し、ᠵ j に現代北京語のそり舌音［tʂ］と舌面音［tɕ］が対応していますので、『滿漢字清文啓蒙』(1730 年題）の著者舞格は ᠴ c と ᠵ j に、そり舌音［tʂ^h］［tʂ］と舌面音［tɕ^h］［tɕ］を区別せず当てたということになります。

中村：もっとも、漢語の舌面音［tɕ^h］［tɕ］を当てた方は ji-のように母音文字 i が後続し、漢語のそり舌音［tʂ^h］［tʂ］を当てた方は j-のように母音文字 i は後続しないので、実質的には舌面音とそり舌音は、後続する母音文字 i の有無によって区別されています。

吉池：満文 j-には、漢語のそり舌音を当て、満文 ji-には、漢語の舌面音を当てたということですね。

尖音と団音

中村：問題が少し横道に逸れますが、北京語の舌面音［tɕ^h］［tɕ］には問題があります。北京語の舌面音は 16 世紀以前には二種の音にさかのぼることが分かっています。ts^{h}i-ツィ・tsi-ズィ・si-スィと、k^{h}i-キィ・ki-ギィ・xi-ヒィです。漢語音韻学の用語では、前者を尖音、後者を団音と呼びます。『滿漢字清文啓蒙』(1730 年題）の時代には漢語の尖音と団音は合流し舌面音［tɕ^{h}i-］［tɕi-］［ɕi-］となっていたが、有圏点新満文が作られた 1632 年頃、すなわち 17 世紀前半には、尖音は［ts^{h}i-］ツィ・［tsi-］ズィ・［si-］スィのままであったが、団音は後続する母音 i の影響で口蓋化し舌面音［tɕ^{h}i-］［tɕi-］［ɕi-］と成っていたというのが有力な説[9]です。

吉池：満洲文字による表記が、尖音と団音の区別の時期を探る材料になるわけですね。尖音と団音の区別の問題は複雑なので、後日検討し確認をすることとして、今回の議論では、ᠴ ᠵ との関連に絞りたいと思います。

ᠴ ᠵ における圏（◦）の機能について

---

[9]　［si-］は［ts^{h}i-］［tsi-］に先行して［ɕi-］となっていたという論もある。
山崎雅人(1990a)「『大清太宗文皇帝実録』の満洲語音訳漢字から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について」『文化』第 53 巻 第 3・4 号、304-286(19-37)頁。山崎雅人(1990b)「『〔満文〕大清太祖武皇帝実録』の借用語表記から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について」『言語研究』98、66-85 頁。

中村：『満漢字清文啓蒙』(1730 年題）では、ᡳᡳ に、そり舌音の「勅」（現代北京語［tʂʰʅ］）を当て、ᡳᡳ に、そり舌音の「智」（現代北京語［tʂʅ］）を当てます。圈（◦）を付さない ᡳᡳ ci には、尖音の「七」（17 世紀前半［tsʰi］、18 世紀前半［tɕʰi］］を当て、ᡳᡳ ji には団音の「飢」（17 世紀前半［tɕi］、18 世紀前半［tɕi］）を当てます。すでに見たように、そり舌音と舌面音を通常は区別しないのですが、「勅」［tʂʰʅ］・「智」［tʂʅ］（北方漢語に限れば 17 世紀の前半であっても 18 世紀の前半であっても現代北京語と大きくは違わないであろう）に対しては、圈（◦）を付して新たな文字を作りだして「七」「飢」とは区別しています。対応するピンイン表記で説明すると、「q, j」と「ch, zh」は通常は区別しないけれども、「qi, ji」と「chi, zhi」に限っては区別するということです。

吉池：両者はよほど聴覚印象が異なっていたということでしょうか。そこで問題にしたいのが、ᡳᡳ ci と ᡳᡳ ji に付した圈（◦）です。この圈（◦）ですが、子音文字 c, j に付したものか、母音文字 i に付したものか、それとも音節全体に付したものか、いずれであろうかということです。これはローマ字翻字「c, j」とすべきか「ċ, j̇」とすべきかという問題です。

中村：有圈点新満文の文字を作った人たちがどのように考えたかは措くとして、メレンドルフは、ᡳᡳ ci と ᡳᡳ ji、ᡳᡳ ċy と ᡳᡳ jy と翻字しました。ᡳᡳ ċy と ᡳᡳ jy の、記号「˙」の用い方は不整合です。わたしは第一回の議論の中で、ċy の方を誤記と判断し「˙」を削除し、ᡳᡳ cy、ᡳᡳ jy としました。そして圈（◦）は後続の母音文字 i もしくは音節全体に付したものとしました。

ᡳᡳ と ᡳᡳ の母音文字は i です。i が後続すると、その前の子音は舌尖音もしくは舌面音となってしまうので、子音の横に圈（◦）を付して、ローマ字翻字は i ではなく y とした。母音の翻字を y としながら子音に「˙」を付すのは重複となりますので cy, jy とすることを提案した次第です。

吉池：メレンドルフが、ᡳᡳ ċy と ᡳᡳ jy のように、母音文字 i をわざわざ y で翻字したのは、氏が圈（◦）を後続の母音文字 i もしくは音節全体に付したと理解したため、と考えたわけですね。

中村：メレンドルフの翻字にしたがい、最低限の訂正で抑えるとなると、ᡳᡳ cy と ᡳᡳ jy であろう、ということです。

吉池：しかし、有圈点満文の新文字の作成者たちの意図としてはどうなのでしょう。作成者たちの意図を、子音の ᡳ と ᡳ に圈（◦）を付して、ᡳᡳ・ᡳᡳ と ᡳᡳ・ᡳᡳ を区別したのだ、と理解してもいいのではないでしょうか。そのように理解してよいならば、圈（◦）と「˙」を対応させ、メレンドルフの不整合な表記である ᡳᡳ ċy と ᡳᡳ jy の、j の方に「˙」を付し、また ᡳᡳ は y ではなく文字通りに i で翻字し、ᡳᡳ ċi と ᡳᡳ j̇i とする、という翻字も考えられます。

もっとも、われわれはメレンドルフのローマ字翻字に不都合な部分があることは承知のうえで、そのまま使用している、というのが現状です。日本には、そのようにして使用された長い間の習慣があるので、メレンドルフのローマ字翻字に最低限の調整を加えて使用するというところに止めておくのが穏当なのでしょうが。

中村：メレンドルフの ᠢ i を y とする翻字はやや奇妙ではあります。くり返しになりますが、この翻字を生かすならば ᠴᠢ cy と ᠵᠢ jy とするということです。もっともこれは、メレンドルフの翻字を中心に据えた処置です。有圈点満文の新文字の作成者たちが、どのような意図で圈（◦）を使用したかということについては、翻字法とは別に検討が必要です。

圈（◦）の出所

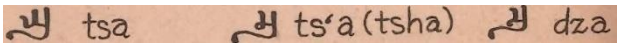
吉池：そこで、有圈点新満文の圈（◦）は何を参照したのか、その出所を考えてみたいのです。

中村：圈（◦）は、ᠭ k[q̇],ᠭᠣ g[ġ],ᠭᠣ h[h] （[h]は池上二郎(1955)に従った表記。口蓋垂音［χ］が適当）、ᠺ k[k̇],ᠺ g[ġ],ᠺ h[x]、ᠺ k̇[k̇],ᠺ ġ[ġ],ᠺ ḣ[x]のように、口蓋垂の摩擦音 h［χ］と軟口蓋の摩擦音 h[x], ḣ[x]に使用されます。

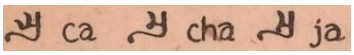
ᠴᠢ cy と ᠵᠢ jy において、圈（◦）が、音節全体に付されたか、子音に付されたか、それとも母音に付されたか、問題となりますが、口蓋垂の摩擦音 h［χ］と軟口蓋の摩擦音 h[x], ḣ[x]に付す用法とはだいぶ異なります。この圈（◦）の出所ですが、（モンゴル文字の）ガリック文字は参考になりますか。

吉池：服部四郎(1946)[10]所収のチベット（西蔵）語音用と梵語音用のガリック文字表に次があります。

チベット（西蔵）語音用



梵語音用



中村：チベット（西蔵）語音用と梵語音用のガリック文字の基本字形 ᠵ は同じです。それぞれの音は、どのような対応でしょう。

[10] 服部四郎(1946)『蒙古字入門』東京：文求堂（龍文書局より社名変更）。

吉池：服部四郎(1946)によると「梵語の ca　cha　ja　が西藏語の　tsa　ts‘a　dza　と同じ字母で表はされるのが注意をひく。わが國でも悉曇の　ca 行が「サ行」に當てられてゐる。傳來の音が恐らく［tʃa］ではなく［tsa］であったためであらう。」（23 頁）とあるから、服部氏は上に挙げたチベット（西藏）語と梵語はともに［tsa］［tsʰa］［dza］のような音と考えていたのでしょう。

中村：子音の調音位置を表す基本字形が ཀ であるのに対して、子音の発音様式（無声無気、無声有気、有声など）の区別のために記号を、それぞれの基本字形の左下に付していますね。

吉池：基本字形に対して、発音様式（無声無気、無声有気、有声など）の区別のために記号を使うというのは、興味深いことと思います。有圈点新満文の ᡴ k[q̇], ᡬ g[ġ], ᡭ h[h]([χ])、ᠺ k[k̇], ᠻ g[ġ], ᠼ h[x]と同じです。

中村：ガリック文字において、チベット（西藏）語音用の ts‘a（tsha）と梵語音用の cha では、基本字形 ཀ の左下に、圈（◦）状の記号が出現しています。これを日本語の「る」の丸のような運筆の一部ではなく、後に圈（◦）が付されたとみなすことも不可能ではありません。吉池さんは、この記号と有圈点新満文の圈（◦）が同じと考えているのですね。

吉池：有圈点新満文の新文字の作成者たちは、ガリック文字で使用されている圈（◦）を参照して、子音の発音様式の区別に利用したと想像します。そのように考えてよいとしたならば、先に議論した、「勅」ᡴᡳᡳ、「智」ᡴᡳᡳ の圈（◦）ですが、子音に付されたということになります。ᡴ k[q̇], ᡬ g[ġ], ᡭ h[h]、ᠺ k[k̇], ᠻ g[ġ], ᠼ h[x]と圈（◦）は子音に付されています、同様に、ᡴᡳᡳ、ᡴᡳᡳ の圈（◦）も子音に付されたとみるならば、圈（◦）の用法は一貫したものとなります。

中村：吉池さんは、有圈点新満文の圈（◦）はガリック文字を参照したものであると“想像する”とのことですが、ほかに何らかの論拠が欲しいところです。

最後に s, ts̈の下に来る母音文字について検討しましょう。

s, ts̈ の下の母音文字

吉池：s, ts̈の下の母音文字は次のとおりです。

	中位	末位
[ü]	s, ts̈の下 [ᡳ]	s, ts̈の下 [ᡳᡳ]

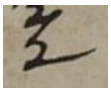
※s の下の場合、例えば「四」[ᡳᡳ] は sy と翻字する。ts̈の下の場合、例えば「此」[ᡳᡳ] は ts と翻字する。

中村：この注記※も、出所はメレンドルフの解説ですが、吉池孝一・中村雅之(2022)[11]で訂正をしました。「tsʹの下の場合、例えば「此」 はtsと翻字する。」の最後の「ts」を「tsʹy」とすべきだ、というものでした。

吉池：問題は母音に付された「八」を左に90度倒したような二点です。これについて中村さん、以前に中村雅之(2008)[12]で言及していましたね。

中村：“子”や“四”などは、初期の満文資料で、①sa/seと表記されたが、ダハイ（達海）たちが有圏点新満文を作る際にまず母音文字a/eの中央右に1画加えて新たな文字②eを作った。更に点を1つ付して漢語音用の母音文字③ï を表記したとするものです。

吉池：この説に沿って、音節sa/seによって、例字を並べると次のようになります。



①無圏点の文字 sa/se

②有圏点の文字 se

③有圏点の文字 sï

①は無圏点満文（「満文原檔」による）です。無圏点満文は母音のaとeを区別しないので、saとseの区別はありません。有圏点新満文（『滿漢字清文啓蒙』(1730年題）による）は、母音eの右に点を一つ付して母音aと区別します。②はseを表記するため点を1つ付したものです。中村雅之(2008)は、②に更に点を1つ付して漢語音 sï を表記したとしました。それが③です。新文字sï が作られた経緯として無理はありません。

中村：新文字 sï の母音は、二画加えたように見えますが、先に一画を加えたができたとすると、新文字 sï の母音は、それに更に一画を加えた文字と理解することができます。そうすると、一画を加えて新文字を作るという有圏点新満文の方針にそった造字法といえるでしょう。

吉池：造字法の方針について、以上をまとめるならば、外国借音（漢語）用の新文字の作成において、kʹ、gʹ、hʹ については、「×」状の字形にしろ、2本の髭を加えた字形にしろ、二画を加えていますが、それ以外は、一画を加えて新文字を作るという有圏点新満文の方針にそった造字法となっているといえそうです。

---

[11] 第一回目の議論。

[12] 中村雅之(2008)「漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字」『KOTONOHA』65、1-4頁。

中村：「×」状の字形が二画を加えたというのはどうでしょうか。「つ」状の字形に一画を加えたものと見えます。

吉池：下に挙げたものは『滿漢字清文啓蒙』（1730 年題）第一巻の「清書運筆先後」による「×」状の k の字形の書き順です。基本字形は ᡴᡠ です。第 1 画目において起筆の部分が基本字形からはみ出ています。このはみ出た部分を余分な 1 画と見なします。第 2 画目の起筆の部分も基本字形からはみ出ています。このはみ出た部分もやはり余分な 1 画と見なします。これで余分な筆画が 2 画あることになります。このように基本字形からはみ出た部分を 1 画と見なすのは、ᡴᡠ に対する ᡴᡠ、ᡴᡠ に対する ᡴᡠ、ᡴᡠ に対する ᡴᡠ、ᡴᡠ に対する ᡴᡠ も同様です。

第 1 画　第 2 画

中村：それでは今回はこれまでとし、次回は満洲文字に付す音について議論しましょう。